

Seamus Heaney と叙事詩への傾斜

平野 幸治

序

私たちの生活に叙事詩的な世界が無くなって久しい。もう叙事詩は文学史の中だけの世界になってしまったのだろう。叙事詩に限ったことではない。詩自体その存在が危うくなっている。こんな素朴な感想を抱いたのは、以前、教養について考えた時に「何を教えるのか」という問題の前に、ある時代やある社会における気風や習慣と教養は密接な結びつきを持っていてその分析から始めないと教えること自体が形骸化してしまい、死んだ知識のみを教えることに終始してしまうと考えたからである。

この研究ノートではアイルランドの現代詩人 Seamus Heaney の叙事詩への傾斜の軌跡を彼の初期の作品から転機となった『ステーション・アイランド』(1984年)まで追ったものである。Heaney の詩の全体の傾向やこの時期の作品についての論考はこれまでもあるが、彼の叙事詩への関心の推移と創作概念との関連性を結びつけたものはないと考えたからである。

I. Heaney の詩を読む：邂逅以前

Heaney は 1995 年度のノーベル文学賞を得た。彼の受賞は、彼の詩を読んできたものには当然のことのように思われる。Heaney は現代詩の詩人としてばかりなく、非英語圏の詩人の英語圏への紹介者としても重要な役割を担ってきた。彼の散文のおかげで東欧圏の詩人を知るようになった。Heaney は、政治と宗教の対立が激しい北アイルランドで生まれ育った。このことは彼の詩のテーマと深く結びついている。

彼の生まれたデリー州北端の農場（Mossbawn であるが）の地名自体にすでに葛藤が見られることは有名である。英語の“Moss”とアイルランド語“bawn”というこの二音節に分かれる地名は、アルスターの引き裂かれた状況を象徴している。先祖代々受け継がれてきた「掘る」という作業でその意味を探ろうとする。もちろん実際の鋤ではなく Heaney の場合はペンですることになる。歴史と文化と伝統の発掘と同時にそれらを現代に顕在化することで人間の記憶の過去と現在に連続性を求めていく。その作業を詩の役割と彼は考える。「過去と現在」、「アイルランドとヨーロッパ」、「理想と現実」、「こまごまとした日常性と観念的な普遍性」をつなぎ合わせるのが詩の役割と彼は考える。最初の詩集『ナチュラルリストの死』（1966）の冒頭の詩「土を掘る」では淡々としたりズムで、「根」からの旅立ちを宣言する。

私の人差し指と親指の間に
太いペンがのっている。
私はこれで掘ろう¹⁾。

祖父や父親が使った鋤の代わりに手に握られているペンで「掘ろう」と歴史や文化そして伝統の発掘を決意する。掘る行為は、時間と空間を同時に顕在にすることであり、現在化することである。このことによって地層から歴史が現われ、古びた断片も歴史の中では重要な意味を帯びる。アルスターのアクセントは、一般に子音が強調され、スタッカートを特徴とすると言われている²⁾。この音が掘る行為と重なっていく。掘る行為は身近なアイルランド特有のボッグ（湿原）に及び、ボッグはアイルランドの記憶を象徴する幾重にも堆積した歴史となり、彼はその記憶を掘り起こしていく。人間の営みを顕在にする堆積層はいずれも文化の継承を意味している。1968年以來、第3詩集『冬を生き抜く』（1972年）を世に出すまで、Heaney は北アイルランド問題を凝視してきた。この詩集はゲール語の喪失、伝統に加えられる暴行、吹き荒れる過酷な

社会の営みを、激しく揺れ動く北アイルランドを、鋭いまなざしで見つめる。1972年1月30日、デリーで「血の日曜日」事件が起こる。13人の市民が虐殺された事件は、イギリスとアイルランドとの対立が激化する契機となった事件である。しかし、Heaneyは1972年に「北」を去って「南」のアイルランド共和国に移って詩作に専念した。これ以降も北アイルランドでは紛争が続いており、多くの人が大変な思いで過ごしてきた。Heaneyは先に書いたように決して政治的に無関心であった訳ではない。でも彼の関心は、アイルランド、そしてデンマークの史跡に及び、この間専らゲール語の作品を翻訳したり、イエイツ、マンデルストロム、ダンテなどの研究に没頭する。彼自身大変辛い思いで日々を送っていたと思われる。詩人としての彼には大きな変化の時期であった³⁾。

第4詩集『北』（1975年）で更に古代と現代を重ね合わせる。「モスバーン——献辞のための2篇の詩」は、冒頭から儀式的な雰囲気を作り出している。日差し、ゆったりした空間、満ち足りた愛といった農家の日常を歌い、次にブリューゲルを呼び出して「年中行事」の背後にある何世紀にも渡る連続性を喚起する。

隣人が殺害された
知らせが入るや
われわれは葬式を思う、
習慣のリズム⁴⁾

この詩集でHeaneyは、単にアイルランドとイングランドの対立だけではなく、北ヨーロッパ全体を自己と関係付け、古代の教義と現代の流血との間に連続性を求めていく。母なる大地はその忠実な者たちの流血で汚れ、悲惨な北アイルランドの現実が噴出する。Heaneyの1972年に「北」を去って「南」のアイルランド共和国に移って詩作に専念したその時の無念さや、詩人として何も出来なかったことのむなしさが一気

に吹き出る。この詩集の中で泥炭層の中に長く埋もれていた骨の物語が語られる。後半に、「何か言うことがあっても、本当のことは言うな」「歌う仲間たち」等の一連の詩のように、彼の詩作では、ほとんど初めてと言っていいほど北アイルランド紛争について直接言及する詩が続く。政治的な事件を題材として、自分の物言わない立場を明らかにした意見表明の作品である。第一部はジャーナリストたちの意見の集め方、まとめ方について批判的に歌う。第二部では、南との国境近くで起こっている殺し合いについて扱い、「我々は炎の側で震えているが、実際の殺し合いに参加したいとは思わない。我々は今までと変わらず、夢中で進んでいくのだ」と言い、「この銃の響きや振動は生みの苦しみだなどとは、単純に言えない。自分は大声で愛国主義の言葉を叫ぶよりも、自分の言葉を捜していく」と言う。第三部では、『『北』の人の無口、場所と時間でしっかりと閉じられた猿轡の口が言い、「詩人だから仕方がなく顔をつぶさないために詩を作る、でも、たとえ何か言いたいことがあっても、本当のことは言うな」と言う。こうして Heaney は、政治について自分がその動きとは別にいる詩人としての自分、政治的な意見を言わない自分を表明する。でも彼には心の揺れがあった。「歌う仲間たち」の一連の詩には、その揺れと苦渋が伺える。「1969年夏」では、スペインで夏を過ごす詩人がゴヤの絵を見て、「彼は拳と肘でその絵を描き、歴史が彼に課した心の血塗られたマントをひらめかす」と述べる。「表出」ではウィックロウの家に戻った詩人が平和な気分を味わう一方で、自分の置かれている位置について後ろめたい気持ちで思いを表出せざるを得ないところを描いている⁵⁾。

Heaney の詩人としての立場、心の揺れがこの時期多くの批判に晒された。その代表的な例は 1991 年アイルランド人のデズモント・フェネルの批判を挙げることが出来る。『何か言うことがあっても、本当のことは言うな——何故 Seamus Heaney が一番人気があるのか』という小冊子の中で、本来詩人の役割は人の思いを代弁したり、人生について新しい光を当てて勇気付けたり、指揮したりするところだが、Heaney の

詩は「安全な」テーマしか扱わないし、ほとんど何も言っていないと批判する。加えて、初期の分かりやすい詩でもイエイツの詩のように人々の口に上がるような名詩句を書いていないし、最近の詩は、言葉の使い方を含めて分かりにくくなって、学者を喜ばず詩しか書いていないと揶揄する。アイルランド人からの批評ということで注目を浴びたし、潜在的にあった Heaney の創作に関する疑問をついていたのでこの時期としては最も当然なところであった。ゴヤの絵に向かったり、ウィックロウの家で人々の批判に晒されて、いろいろ悩んでいるけれども、詩人としての自分はそこから距離を置きながら、自分の言葉を捜していくと言うマニフェストを表現しようとしていると考えられる。別の言い方をすれば、歴史的状況と自分の芸術的想像力との緊張関係という問題を如何に解決し折り合いをつけていくのかと言う段階にいるのである⁶⁾。

II. Heaney と政治の季節

第5詩集『フィールド・ワーク』(1979年)にマニフェストに近い、詩人の立場の自己表明がある。ここで Heaney の詩作に新たな方向が見える。Heaney が長い間求めてきた答えは、具体性、日常性の中にあり、人間関係に潜んでいる。彼は暴力に反対する意見を声高に表現しようとは思わない。寧ろ、その代わりに具体性を強調しようとするのである。その一例が「犠牲者」である。虐殺された13人の姿が詩の中に浮かび上がってくる。その前景には、ある漁師の姿がある。その漁師は詩人と無関係な人物ではなく、大酒飲みでその人となりを十分に描いているため、その死について思いを強くするのである。Heaney 自身は『フィールド・ワーク』の中で一番大切な詩は「グランモア・ソネット」であると言っているように、政治の渦中で批判された先の『北』での主張を再確認して新たな出発を記した詩集である。10のソネットからなるこの詩の第一ソネットは、自分に新しい認識が生まれたことを歌う。「今や素晴らしい生活とは畑を横切り鋤の旋盤から生まれた土のパラダイムを芸術とすることだ。私の草原は深く耕される。古い鋤の跡は

それぞれの意味という下層土を飲み込み根深く、まだ花の咲かない黒バラの芳香に私は活気づく」。詩人と表現するものとの距離についてはよく言われてきたことである。彼の詩の特徴は描かれるものの具体性にある。死者の魂を慰め、深層の世界全体を捉え、北アイルランド紛争をはじめとして、あらゆる対立する現象を和解させようとする試みが見られる。政治の季節を体験した Heaney は、政治的な詩について一定のスタンスを見つけたようである。

第6詩集『ステイション・アイランド』（1984年）は、12篇の連詩「ステイション・アイランド」を中心に据えた三部構成の詩集である。ドニゴールのデルグ湖にある巡礼の島に詩人が行く想定で、先ず巡礼の意味、その具体的な日常、そして亡霊となった魂の出会いなどを経験し、過去のさまざまな人々と出会うことになる。第一部1篇「記念の砂岩石」は、次の4行で結ばれている。

気にかける値打ちもない影法師、
世の中を正すとか、悪くするとか考えずに、
スカーフとウェーダーのなりで身を屈め、
夕暮れを求めて歩く崇拜者の一人⁷⁾。

詩人の居場所はアイルランドの北端、アイルランド共和国と北アイルランドの境界の岬で、詩人はその浜辺で血に染まったヘンリー王子の心臓のように赤い石を拾い上げる。彼の姿は対岸の監視塔の「熟達した」双眼鏡の目に一瞬捉えられたが、直ぐに無視された。赤い石と対照的に詩人の心は透明で、燃え立つことはない。彼は殉教の聖人でも極悪非道の間人でもなく、「柩に納められた心臓」を崇める崇拜者の一人である。「身を屈める」姿勢一つを考えても『ナチュラルリストの死』の「ジャガイモ掘り」の働く姿勢や飢饉の際の神への恭順の姿勢とこの詩の姿勢を同一視することはできない。ここで身を屈める詩人は内なる自己と向かい合う詩人の姿である。第三部「生き返ったスウィーニー」は

伝説を生きるアルスターの狂った王スウィーニーの「鳥の目」を通して外の世界の変容と詩人の内面世界の変容を二重写しに、詩的想像力の意味を問い直している詩だと思われる⁸⁾。

自分自身にも信じがたい思いで、私はいた。

私と私の話を、仮にそれが信じられない人たちの中に⁹⁾。

スウィーニー伝説を自己の神話として読み込みながら、詩人は未体験の飛翔を試みる。後ろから追い迫る足音に全神経を集中するオルフェウスの下降（第一部の「地下鉄」）と憩いの枝を追われるスウィーニーの空中の彷徨が、Heaneyの想像力の中で一つに収斂する。この12篇の連詩「ステーション・アイランド」は、Heaneyの言う「魂の救済」が最も率直に表れた詩と言える。死者の声を自分の声として受け止め投げ返す巡礼行は、言わばHeaneyの『神曲』であり、罪の贖いと同時に詩の救済へと向かう過程でもある。外の世界の現実が、第9篇の詩ではハンガーストライキの犠牲者の「鎮まらない魂」との邂逅として歌われる。現実には抗し、自己否定と自己肯定の間を揺れ動きながら、詩人は詩的想像力を通して自分が変わり得る可能性をその詩の終わりで次のように暗示する。

身をすり減らして、別な核に生まれ変わるようなもの。

それから私は、鹿を見つけるまで踊り続けるのだ

必ず実を結ぶ踊りを踊る種族のことを考えた¹⁰⁾

思索している詩人、内省する詩人がここにいる。この思索の旅の導きをする者がジェイムズ・ジョイスである。この12篇の連詩「ステーション・アイランド」の中で詩人は、亡霊となった魂との邂逅を経験し、過去の様々な人達と会い、助言を受ける。その典型はジェイムズ・ジョイスで、ゲール語の詩を書くべきかどうか、また詩人のあり方につ

いて悩んでいた詩人に対して、ジョイスは、「そういうことにもう悩む必要はない、思ったとおりの詩を書いていけばよい」と助言を与えて去っていく。

懺悔服を着るのも悔恨も他の人に任せ、
自在に、飛び、忘れなさい。

あなたはもう十分に聞いた。今度はあなたの歌を歌うのだ¹¹⁾。

瘦身でステッキをついたジョイスの描写は見事である。巡礼の島という特殊な環境に自分を置くことで、アイルランド人としての自分を取り巻く政治的、宗教的な束縛から解放する役割をこの詩集が果たしている。そのことはジョイスとの邂逅でも明らかである。境界を渡らなければならない予感がジョイスの霊を詩人の内部に呼び出したと言える。この12の連詩は、巡礼の同行者となる読者にアイルランドの規範を示しながら、これまでの Heaney の詩とこれからの彼の詩との接点を明らかにしてくれる意義を持つ詩集と言える¹²⁾。

III. Heaney の詩を読む：邂逅以後

『さんざしのランタン』（1987年）では、子供の頃の思い出が描かれている。この導入の仕方は『ナチュラルリストの死』と似ているが、表現は大きく異なっている。ほんの小さなものが単に象徴的というのではなく、具体的に描かれている。その具体性を突き詰めていくと大きな意味合いを持つものになる。個々の事物がやがて別なイメージとなって他の次元の世界へと収斂する。「さんざしのランタン」や「アルファベット」などがその例である。この『さんざしのランタン』は、なくなったものへの省察と新しい旅立ちのヴィジョンが交錯する、情感に富む詩集である。サンザンの赤い実が「小さな人間が自尊心の灯芯をたやさないように守っている小さな灯火」に変わる。この詩集は読み手の意識の中に死者を浮上させる。「詩の目的は平和である」という一行は印象的で

ある¹³⁾。1986年 Heaney は T・S・エリオットを記念する講義をケント大学で行い、それを評論集『言葉の支配』(1988年)として出版した。その基調講演の中で、Heaney はイエイツについて述べたりチャード・エルマンの言葉を引用しながら、詩人の有様は様々であるとしても、究極的にはどの詩人もその詩人の詩的要請に詩人の言葉で応えるものだという言い方をしている。『言葉の支配』の中で詩の役割を次のように述べている。

詩は、それ自身の真実を持っており、詩人が社会的、道徳的、政治的、歴史的眞実という強制力を持った力にどれだけ妥協しても、究極的には芸術の要求と約束に忠実でなくてはならない¹⁴⁾。

この時期の Heaney の詩と社会や政治に対するスタンスを表している。この内容は、「ステーション・アイランド」の中のジョイスの助言と相通じるものがある。詩人が自分の言葉を探求し確かめる詩作の道筋がはっきりと見て取れる。

IV. Heaney と叙事詩への傾斜

政治の季節を体験した Heaney が、現実に対して詩の持つ役割、あるいは詩の政治性について一定のスタンスを見つけたと前章で指摘した。Heaney が「安全なテーマしか扱わないし、ほとんど何も言っていない」と晒された批判や、その批判の背後に潜む「詩人とは本来人々の思いを代弁したり、人生について新しい光を当てて勇気づけたり、指揮したりする機能を担っている」という詩人の社会性に関する問いかけに答える必要があった。この問いに対する Heaney の答えは、日常性の中にあり、その人間関係の中に潜んでいる。暴力に反対する意見を理念的に声高に表現するのではなくて、その代わりに具体性で説得しようとする。日常の具体的な出来事に拘るのである。彼の詩が、詩人の個人的な出来事や瑣事から出発する所に彼の持つ叙事詩への傾斜がある。Heaney にとって epic とは episodic である。ジョイスが『ユリシーズ』で展開した epic の世界が mock-epic で episodic であったこ

とを考えると、ステッキについて現れた瘦身のジョイスが「ステーション・アイランド」で詩人に助言を与える邂逅は意義深い。それぞれの場所、物、人々との思い出という具体的な事実や言葉を用いながら、つまり episodic なものから民族の歴史の全体像にいたるという詩作の方法が Heaney の叙事詩性といえる。

Notes

- 1) “Digging” *Death of a Naturalist* (Faber & Faber).
- 2) Neil Corcoran, *A Student's Guide to Seamus Heaney* (Faber & Faber) p.p.51-53.
- 3) 清水 重夫、「シェイマス・ヒーニーと現代アイルランド詩」『英語青年 Vol.CXLII』(研究社、1997年) p.591。
- 4) *North* (Faber & Faber).
- 5) 清水 重夫、「シェイマス・ヒーニーと現代アイルランド詩」『英語青年 Vol.CXLII』(研究社、1997年) p.p.592-3。
- 6) Catherine Malloy and Phyllis Carey, ed., *Seamus Heaney: The Shaping Spirit* (Jonathan Cape, 1996).
- 7) *Station Island* (Faber & Faber).
- 8) 小野 正和、「現実の圧力を押し返す想像力」『英語青年 Vol. CXLII』(研究社、1997年) p.604。
- 9) *Station Island* (Faber & Faber).
- 10) *Station Island* (Faber & Faber).
- 11) *Station Island* (Faber & Faber).
- 12) 小野 正和、「現実の圧力を押し返す想像力」『英語青年 Vol. CXLII』(研究社、1997年) p.605。
- 13) *The Haw Lantern* (Faber & Faber).
- 14) *The Government of the Tongue* (Faber & Faber).

Work Cited

- 『シェイマス・ヒーニー全詩集 1966～1991』村田辰夫、阪本完春、杉野徹、薬師川虹一訳（国文社、1995年）。
- 小野 正和、「現実の圧力を押し返す想像力」『英語青年 Vol.CXLII』（研究社、1997年）。
- 清水 重夫、「シェイマス・ヒーニーと現代アイルランド詩」『英語青年 Vol.CXLII』（研究社、1997年）。
- 徳永 暢三、「音韻と自然（1）」『英語青年 Vol.CXXXIX』（研究社、1993年）。
- 水之江 有一、『現代アイルランド・イギリス詩学』（多賀出版、1997年）。
- Harold Bloom, *Seamus Heaney* (Harvard, 1986).
- Neil Corcoran, *A Student's Guide to Seamus Heaney* (Faber & Faber, 1986).
- Catherine Malloy and Phyllis Carey, ed., *Seamus Heaney: The Shaping Spirit* (Jonathan Cape, 1996).
- Seamus Heaney, *Death of a Naturalist* (Faber & Faber, 1966).
- , *The Government of the Tongue* (Faber & Faber, 1988).
- , *The Haw Lantern* (Faber & Faber, 1987).
- , *North* (Faber & Faber, 1975).
- , *The Redress of Poetry* (Faber & Faber, 1995).
- , *Station Island* (Faber & Faber, 1984).